



Data

監督・製作：ブライアン・シンガー
出演：トム・クルーズ/ケネス・ブ
ラナー/ビル・ナイ/テレン
ス・スタンブ/トム・ウィル
キンソン/エディ・イザード
/クリスチャン・ベルケル/
カリス・ファン・ハウテン/
トーマス・クレッチマン/ジ
エイミー・パーカー/デヴィ
ッド・バンバー

👁️👁️ みどころ

ヒトラー暗殺とワルキューレ作戦の融合！それは、かつてホリエモンこと堀江貴文が唱えた、「通信と放送の融合」と同じように鋭いアイデアだが……。題材は最高！緊張感溢れるストーリー展開もグッド！しかし、いかんせん英語では……。？他方、計画どおり爆弾は爆発したのに、なぜヒトラーは軽傷のみ？それは、ドイツ人は自爆テロや神風特攻隊の精神と無縁のため？そんなことを、つい考えてしまったが……。

その事件は、1944年7月20日に！

日本人なら誰でも1932年の5・15事件や1936年の2・26事件を知っているが、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件とワルキューレ作戦発動を知っている人は少ないはず。他方、音楽好き、オペラ好きの人なら、リヒャルト・ワーグナー作曲の『ニーベルングの指輪』4部作の1つである『ワルキューレの騎行』を誰でも知っている。そして、フランシス・フォード・ Coppola 監督の『地獄の黙示録』(79年)で使われたこの曲は、ワーグナーの『ワルキューレの騎行』を知らない人でもきっと耳にしたことがあるはず。だってこれは1度聴いたら誰の耳にも残る、力強くかつカッコいい曲だから。しかし、そんな有名な曲の名前をつけた「ワルキューレ作戦」って、一体ナニ？

これは、ヒトラーの死亡や反乱など国内有事の場合、すべての武装勢力を国内予備軍の指揮下に置き、戒厳令を布告して、政府の全官庁、放送局、交通・通信等をすべて掌握するという計画。『ヒトラー～最期の12日間～』(04年)で描かれたように、ヒトラーが自殺したのは1945年4月30日。その9カ月前にそんなワルキューレ作戦がホントに

発令されたことがあったとは！

歴史好きを自認している私だが、まだまだ知らないことがいっぱい。さあ、こんな映画からあなたは何を学ぶ？

題材はベストだが、トム・クルーズでは？

歴史好きの私には、『ヒトラー～最期の12日間～』や『ヒトラーの贖札』（06年）と同じように、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件やワルキューレ作戦には興味津々。今までドイツにこれを描いた映画がないとすれば、それが不思議なくらいだ。したがって、題材はベストだが、トム・クルーズでは？また、ブライアン・シンガー監督では？もっともこれは、トム・クルーズが俳優やプロデューサーとしてダメだと言っているわけではないから、決してそんな誤解をされないように。

ヒトラー暗殺計画の実行犯であり、もし暗殺とその後のワルキューレ作戦が成功すれば国防相次官に就任する予定だったシュタウフェンベルク大佐を演じるトム・クルーズのこの映画における演技はちょっとカッコ良すぎるくらいはあるが、ほぼパーフェクト。しかし、いくら名優でもいかんともしがたいことは、彼はアメリカ人であってドイツ人ではないということだ。トム・クルーズをはじめとする多くの米英の俳優が英語をしゃべりながらヒトラー暗殺計画を練り、実行する姿には、学生時代に少しはドイツ語をかじった私には大きな違和感が。

さらにこの映画の監督は、『X-MEN』（00年）や『スーパーマン リターンズ』（06年）等でハリウッド大作を商業的に大成功させたアメリカ人のブライアン・シンガー監督。この映画の迫力あるスリリングな展開は、さすがブライアン・シンガー監督の演出と感心するものの、やはりブライアン・シンガー監督の演出にも違和感が。そのうえ、ヒトラーを演ずるデヴィッド・バンバーもイギリス人。もちろん、顔と風貌は実在のヒトラーに似せているからしゃべらなければ何の問題もないのだが、事件の終息を決定づけたヒトラーのラジオ放送が英語というのはいくら何でも……。これではドイツ人はもちろん、日本人の私でも違和感を持つのは当然では？そのため、作品としては星5つだが、マイナスイ点として星4つ……。

暗殺とワルキューレ作戦の融合は、すごいアイデア！

この映画では最初に、トレスコウ陸軍少将（ケネス・ブラナー）らによるヒトラー暗殺計画実行の姿が緊張感の中で描かれる。ヒトラーが乗った飛行機の中に、おみやげとして持たせた高級ウスキーに仕込んだ雷管装置付きの爆弾をうまく持ち込ませたのだから、後は予定時間での爆発を待つばかり。ところが残念ながらその爆弾は爆発しなかった。それはなぜ？それは「荷物室の凍えるほどの寒さによって、化学反応が起こらなかったため」と言われているらしい。

プレスシートやネット情報によれば、ヒトラーの暗殺計画と暗殺未遂事件はたくさんあり、トレスコウ少将の例はその1つ。この映画が描く1944年7月20日の暗殺未遂が最終の暗殺未遂事件となったわけだが、シュタウフェンベルク大佐のアイデアが、それまでのヒトラー暗殺計画と根本的に違うところは、暗殺とワルキューレ作戦を融合させたこと。つまり、それまでの暗殺計画はヒトラー暗殺がすべてで、暗殺後の処方箋は何も描かれていなかったのに対し、シュタウフェンベルク大佐は暗殺後のことまで構想し、ナチスドイツが策定しているワルキューレ作戦を逆利用するというアイデアを思いついたわけだ。こりゃすごい。

ホリエモンこと堀江貴文のかつての盟友宮内亮治は2009年1月25日上告を取り下げたため有罪が確定したが、堀江貴文は今なお上告して無罪を争っている。そんな堀江貴文が唱えたのが「通信と放送の融合」。その実現のためにニッポン放送の買収まで手を伸ばしたわけだ。堀江貴文の逮捕とその凋落によって、通信と放送の融合という斬新なアイデアがボシャってしまったのは残念だが、シュタウフェンベルク大佐が唱えたヒトラー暗殺とワルキューレ作戦との融合も、いわばそれと同じような斬新なアイデアだったはず。しかし、その結末は・・・？

岡本太陽氏の「45点」をどう評価？

私が評論を書くについて時々参考にしているのが岡本太陽氏の「米映画批評」だが、この映画に対する彼の批評はかなり辛口、そしてその評価は45点と非常に低い。その最大の理由は、「主演のトム・クルーズは黒い眼帯を付け、ドイツ軍の軍服に身を包んでいる以外は、よく見るトム・クルーズが演じる役と変わらない。ドイツ人を演じていてもやはりアメリカンなのだ」ということだから、これは私が持った違和感と全く同じ。

しかしその他の、「本作は『X-MEN』や『スーパーマン リターンズ』の様にただ大作映画という印象のみ受けてしまう」、「この映画は全部が嘘っぽく見えてしまっており、そのせいで物語に入り込む事がむずかしい」という批評には、私は納得できない。もちろん、ヒトラー暗殺が失敗に終わるという結末はわかっているから、その分スリルがないといえそう。しかし、そう言ってしまうと、ボリビアの軍事政権の打倒を目指してボリビアに乗り込んだチェ・ゲバラが結局失敗して処刑されることがわかっている『チェ39歳 別れの手紙』(08年)でも、スリルあるストーリー展開は期待できなくなってしまうことになるから、それはナンセンス。

もっとも、シュタウフェンベルクの妻ニーナは刺身のつま程度の役割だから、わざわざ『ブラックブック』(06年)で熱演したカリス・ファン・ハウテンを起用しなくても良かったと感じる。「将校たちが身につけている服やブーツ、スタジオセットまで華やかな感じがリアルさを提供していない」という意見は私もほぼ同じ。米英の俳優がドイツ人将校を演ずるからことさら気を配ったのかもしれないが、衣装や美術がドイツ的になれば

なるほど、英語によるセリフに違和感が生じるという自己矛盾は、この映画が持つ根本的欠陥と言わざるをえない。しかし、岡本太陽氏の45点という採点は、あまりにも厳しすぎるのでは・・・？

暗殺チームの連携は？

ヒトラー暗殺計画を行うには、極秘性が絶対条件。したがって、その観点からは1人の単独プレイがベストだが、1人では情報の入手、武器の手配、ヒトラーへの接近等々、暗殺の実行は困難。そこでどうしても暗殺チームを結成せざるをえないが、その人数が多くなると極秘性の保持のみならず、チームの連携プレイも難しくなってくる。しかしこの映画を観ていると、陸軍参謀総長のベック（テレンス・スタンプ）や国内予備軍副司令官のオルブリヒト將軍（ビル・ナイ）、そしてオルブリヒト將軍の副官であるクヴィルンハイム大佐（クリスチャン・ベルケル）などたくさん軍の幹部が暗殺チームに参加していることに、まずビックリ。

そんな暗殺チームの幹部たちは、新たにチームに加わったシュタウフェンベルク大佐によるヒトラー暗殺とワルキューレ作戦の融合というアイデアの斬新さとスケールの大きさに驚いたが、そこにはクリアすべき課題もいろいろあった。それはあなた自身が緊張感を持ちながら自分の目で確認してほしいが、これだけ規模の大きい作戦を多くの人間が首尾よく決行するには、よほどのチームワークが必要だ。もちろん予行演習をすることは不可能だから、ぶっつけ本番、命を懸けた一発勝負となる。作戦は大きく分けて2つ。1つは、暗殺の実行部隊を担うシュタウフェンベルク大佐と副官のヘフテン中尉（ジェイミー・パーカー）、もう1つは、暗殺成功の報告を受けた後、ワルキューレ作戦を発令しベルリンを掌握するオルブリヒト將軍たちの部隊（司令部）だ。

いくら綿密な計画を立てても、現実にはさまざまなハプニングが起きることがあるから、問題はそんな場合の臨機応変の判断力と行動力。ちなみに、決行日の7月20日、当日になって会議場所が変更されたうえ、開始時刻も30分くりあげられたが、さてその対応は？さらに、1941年12月8日の真珠湾奇襲作戦の成功を打電する「トラ・トラ・トラ」(われ奇襲に成功せり)に相当する、シュタウフェンベルク大佐からの「ヒトラー暗殺に成功せり」の報告は計画どおりにオルブリヒト將軍に届くの？もし、これらの点でチームワークに不協和音が生じたら・・・？

そんな「チームの連携」という観点からも、しっかりシュタウフェンベルク大佐とオルブリヒト將軍たちの動きを観察したい。

日本との違い その1 - 軍幹部の中に反体制派が

自民党最大派閥、森喜朗最高顧問率いる町村派の内紛劇は、2009年2月5日の2時間を超える激論の末、町村信孝前官房長官を会長とし、中川秀直元幹事長を代表世話人の

まま留任させることで決着したが、これは私の予想では町村派の分裂の始まり。それはともかく、日本では歴史的に見て、国の将来を真剣に考える軍の青年将校たちが軍の上層部や政府首脳に対して抱く不平不満はあっても、町村派や自民党の内紛劇ほど激しくはなかったはず・・・？

1930年代以降軍国主義を急速に強めていった日本（大日本帝国）では、天皇制や軍部に対して真正面から反対するのは日本共産党だけだった。それに比べると、ナチスヒトラー政権下のドイツに、この映画で見るとような反体制派が軍部の中にこんなにたくさんいたことにビックリ。日本でも一部反体制派の軍人はいただろうが、それはせいぜい尉官や佐官クラスで、将官クラスはいなかったはず。近時、北朝鮮では金正日の後継者問題が焦点になっているが、ナチスヒトラー下の軍部でもこんなにたくさんの反体制派がいたのだから、金正日体制下での北朝鮮軍の中には、想像以上に多くの反体制派がいるのかも・・・？

日本との違い その2 - 日本なら誰を暗殺？

明治憲法下では天皇が統帥権をはじめとするすべての権力を一手に掌握していたが、「天皇制打倒！」を唱えたのは日本共産党だけ。5・15事件や2・26事件で決起した青年将校たちも、腐敗した政治家や軍幹部には怒っても、決して天皇陛下に対して怒りを向けることがなかったのが日本の特徴。また、「一人一殺」を唱えた日蓮宗の僧侶である井上日召が率いた血盟団による1932年の連続テロ事件（血盟団事件）のターゲットは、政党政治家、財閥重鎮、特権階級などであり、「天皇陛下を中心とした国家革新」が彼らの理想だった。

それに対して、ドイツではヒトラーがすべての権力を一手に掌握していたから、反ヒトラーの人たちのターゲットがヒトラーに向かったのは当然。そのため、ヒトラー暗殺計画が40件もあり、現実に何度も実行されたわけだ。しかし、日本では？日本では天皇陛下暗殺を狙った組織的な事件は全くなく、5・15事件、2・26事件は「天皇陛下の意思を実現すべき政府首脳がサボっているのはけしからん」という思想にもとづく政府首脳の暗殺計画だった。そんな点が、三国同盟を結び、共通の敵である米・英・蘭などと戦った日本とドイツの違い・・・？

自爆テロとは？神風特攻隊とは？

オバマ新大統領の基本戦略の1つが、イラクからの早期撤退とアフガンへの兵力増強。それによって、中東の平和と民主化が実現できれば万々歳だが、イスラム教の教えにもとづく（？）自爆テロの根絶はまだまだ先・・・？ブッシュ大統領の重大な決意によってアフガニスタン平定し、イラクのフセイン政権を打倒したにもかかわらず、自爆テロが収まらないのは一体なぜ？イラクの軍備をいくら増強しても自爆テロの防止が困難なことは、『リダクテッド 真実の価値』（07年）をみても明らかだ。

他方、今の日本は世界一の平和を満喫しているが、太平洋戦争中の日本は神風特攻隊で、アメリカ（人）を震撼させた神の国。太平洋戦争末期に一躍有名になった日本の神風特攻隊は、武士道精神とのケツタイな融合をもとに人間の命の価値を無視する下の下の策だが、それなりのアピール力があつたことはたしか。しかし、アメリカの強力な防御網のもとに、局面の転換力を持つに至らなかつたのは、当時の物量状況を見れば仕方ないところ。もし、イスラム教の自爆テロの精神や日本の神風特攻隊の精神を、1944年当時の反ヒトラーのドイツ人将校たちが持っていれば・・・？

なぜ、ヒトラーは軽傷で終わったの？

1944年7月20日のシュタウフェンベルク大佐によるヒトラー暗殺計画が結果的に失敗に終わったのは、神の偶然のなせるワザ・・・？つまり、シュタウフェンベルク大佐がカバンの中に仕込んだプラスチック爆弾はたしかに会議場で爆発したのだが、ラッキーにもヒトラーは打撲と火傷、鼓膜を損傷するという軽傷で終わったわけだ。その原因はネット情報によれば、当日気温が高かつたため、地下会議場で行われる予定の作戦会議が地上の木造建築の会議室で行われ、窓も開け放され、仕掛けた爆弾の威力を削ぐ結果となつた、会議の開始が直前になつて30分早まつたため、用意していた2個の爆弾のうち1個しかセットできなかつたためらしい。

ドイツ人は、自爆テロや特攻精神と無縁？

それはそれでわかるのだが、もっと突き詰めて考えれば、そんな中途半端な結果に終わったのは、シュタウフェンベルク大佐が爆弾を仕掛けた後速やかに現場を退去し、副官のヘフテンと共にベルリンに戻る計画だったため。別の言い方をすれば、爆発確認後シュタウフェンベルク大佐が現場を離れず、ヒトラーの死亡確認を至上命題として現場に残っていれば、あの爆発にもかかわらずヒトラーが幸運にも生き残っていることを確認したシュタウフェンベルク大佐は、その場でヒトラーを射殺することができたはず。さらに突き詰めて言えば、7月20日に総統大本営「ヴォルフスシャンツェ」で開かれた作戦会議にシュタウフェンベルク大佐が予備軍幕僚として出席することができたのであれば、その会議の場で隙をみてヒトラーを射殺することだって可能だったはず。

しかしそういう行動をとれないのは、ドイツ人は自爆テロや神風特攻隊の精神とは無縁で、アメリカ人と同じように危険な任務を全うした後、いかに無事に帰還するかという点にウエイトを置いて考えているためだ。コトのよし悪しは別として、目的のためには手段を選ばずという価値観、あるいはイスラム教の自爆テロや日本の神風特攻隊のような思想でシュタウフェンベルク大佐がヒトラー暗殺を目指していれば、あんな恵まれた条件下では、その実現は99.9%可能だったのでは・・・？

2009（平成21）年2月7日記



「ワルキューレ」

(TOHOシネマズ梅田ほかで公開中)

もしこの暗殺が成功していたら？

リンカーンもケネディも、坂本龍馬も井伊直弼も暗殺されたが、荊軻による秦の始皇帝暗殺は未遂。一九四四年七月二十日に決行されたクラウス大佐らによるワルキュー

レ(W)作戦も、爆弾の炸裂で多数のドイツ軍将校が重傷を負ったのに、ヒトラーは奇跡的に軽傷で済んだから未遂。歴史に「if」はありえない

が、もし爆弾が二個セツトされていれば？ もし爆弾入りの鞆が移動されていなければ？

ヒトラーが心酔していたワグナーの楽劇『ワルキューレ』の名をとった軍の極秘計画は、数百

議室。爆発までの時間は十分間。さあ爆発の成否にドイツの運命が。W作戦発動権を持つのは日和見派の予備軍司令官フロム。大佐から「爆発成功！」の電話を受けたベルリン待機組は、いかに彼を説得？ またW作戦発動の決断とその後展開は？

万の連合軍捕虜たちの反乱を想定、それを鎮圧するため前年十月に立案されたもの。万一の時は国内予備軍が戒厳令を敷き、政府の全権を掌握する内容だ。そんなW作戦を二七命令で逆手に取り、暗殺後の新ドイツ政府樹立を目指した大佐の構想の卓抜さと壮大さはお見事！

ベック元陸軍参謀総長、トレスコウ陸軍少将、オルブリヒト予備軍副司令官など、反ヒトラー組織の人材は豊富。ベックはヒトラー暗殺後樹立される新政府の元首、大佐は国防次官の予定だ。大佐が爆弾入りの鞆を置くのは、ムッソリーニとの会談が予定される総統大本営「狼の巣」会議室。爆発までの時間は十分間。さあ爆発の成否にドイツの運命が。W作戦発動権を持つのは日和見派の予備軍司令官フロム。大佐から「爆発成功！」の電話を受けたベルリン待機組は、いかに彼を説得？ またW作戦発動の決断とその後展開は？

黒の眼帯とナチス将校姿のトム・クルーズは凛々しいが、米国人俳優たちの英語によるヒトラー暗殺謀議とその実行に違和感があるうえ、W作戦の失敗は歴史上既知の事実。しかし、本作から彼らの決意と暗殺実行の緊迫感を体感し、W作戦の意義を学びたい。

もし、現場に居た通信手段が用意されていたら？ また、大佐が自爆テロも辞せずの特攻精神の持ち主だったら？ 歴史の事実「if」はいくつも。

大阪日日新聞 2009(平成21)年3月21日